短 報

ムネアカトゲコマユバチ (新称) *Odontobracon bicolor* ENDERLEIN と寄主ブドウトラカミキリ¹

土 谷 恒 雄
山梨県農業試験場果樹分場

ムネアカトゲコマユバチは、SAUTER が台湾の高雄で採集した1頭の雄をENDERLEIN (1912) が新種として記載した。その後、FAHRINGER (1930) は本種が支那にも産することを明らかにしたが、渡辺千尚博士 (1937) は、上記のほか日本 (本州、四国、九州) にも多数産することを報告している。また、南川仁博技官は、静岡県千頭、家山、用宗、高知県などで多数の成虫を採集されている。しかし、その寄主については楚南 (1944) が台湾にてタケノトラカミキリをあげている以外に、日本内地では今日まで報告されていないようである。

筆者は、本寄生蜂がブドウトラカミキリの幼虫に寄生

することを観察したのでここに報告して参考に供したい。

なお、本文を草するに当たり、寄生蜂の同定ならびに文献について御教示賜った農林省東海近畿農業試験場茶業部南川仁博技官に厚く御礼申しあげる。

形 態

ムネアカトゲコマユバチの雌は、体長 10~15 mm、産卵管は腹部と同長。頭胸部は赤褐色、複眼、触角、腹部、脚、翅および産卵管鞘は黒色。触角は体よりやや短く、鞭節の第2節は、第3節とほぼ同長。大腿は黒色。頭は厚く複眼の間隔と同長、白色短毛を密生し、頭頂および後頭はほとんど平滑で光沢がある。頬は複眼と同長、顔は方形で点刻と白色短毛を密生し、後頭部には隆起縁がある。中胸背は平滑で光沢があり、小楯板は少しく隆起し、わずかに点刻があり、前縁に4個の縦溝がある。前伸腹節には網目状の彫刻を密布し胞室を欠く。腹部第1・2節には縦刻を密布するが、第2節では後縁に達せず、後縁は平滑である。また、第2節の中央は少しく隆起し後方の両側に斜溝がある。第3節以下は平滑。後脚基節の上面には長短2個の強壯なる刺状突起を備え

る。脚にはやや長い白色毛を生じ、前翅の中横脈は径脈の後方から出で、肘室は3個よりなっている。

雄は体長 6~11 mm で雌と同色である。

幼虫は乳白色、体長 4~10 mm。繭は長さ 8~16 mm、円筒形で淡褐色、薄く不透明。成虫脱出孔の径は約 2 mm である。

生 態

ブドウトラカミキリは、わが国におけるブドウの最も恐ろしい害虫であり、適切な防除法がないので、ブドウの若木は特にはなはだしい被害を受けている。成虫の羽化出現期は、山梨では8月上旬~9月下旬である。

第1図 ムネアカトゲコマユバチ (×2.5)
A: ♀ B: ♂

¹ On a Hymenopterous Parasite, *Odontobracon bicolor* ENDERLEIN of the Grape Borer, *Xylotrechus pyrrhoderus* BATES. By Tsuneo TSUCHIYA, Horticultural Branch, Yamanashi Agricultural Experiment Station, Manriki, Yamanashi Pref. Japanese Journal of Applied Entomology and Zoology, vol. 2, no. 2.

第2図 左: ムネアカトゲコマユバチ幼虫
中: 同 繭
右: 繭に残った脱出孔

筆者は 1954 年、本害虫の発消長を調査するため、山梨県下のブドウ栽培地および長野県東筑摩郡宗賀村よりブドウトラカミキリ幼虫の喰入被害枝を採集し、野外網室で飼育中、ムネアカトゲコマユバチが本害虫の幼虫に寄生していることを発見し、多数の寄生蜂を羽化せしめた。

本寄生蜂の成虫は 5 月上旬ごろから羽化を始め、6 月上、中旬ごろ最も多く羽化するようであるが、羽化消長については目下詳細に調査中である。

ブドウトラカミキリ幼虫に対する本寄生蜂の寄生率は、607 本の幼虫喰入被害枝について本害虫の脱出孔を調べた結果、ブドウトラカミキリの羽化数 727 頭、寄生蜂の羽化数 534 頭で、42.3%の寄生率を示している。

本寄生蜂の和名については、本属の特徴である後脚基節の上面にある 2 個の刺状突起を表示するため、また胸が赤いため、ムネアカトゲコマユバチと南川拔官が命名した。

引用文献

- ENDERLEIN, G. (1912) Arch. Naturgesch., 78 A, 2: 29.
FAHRINGER, J. (1930) Opus. Braconologica 2: 55.
WATANABE, C. (1937) Jour. Fac. Agric. Hokkaido Univ. Sapp. Japan 42: 38.
楚南仁博 (1944) 台湾総督府農試彙報 222: 7.

ダイコンサルハムシ幼虫の令期判定^{1,2}

船 木 諭

島根農科大学応用昆虫学研究室

1957 年秋、ダイコンサルハムシ *Phaedon brassicae* BALY の生態について調査を行った。その際、幼虫の令期を決定する必要が生じてきた。

昆虫の令期の判定で最も普通に用いられている方法は、頭部またはその付属器官の長さを測ることである。しかしこれは実用的にはかなりめんどうであるとして、小山・福島 (1953) は、オオニジュウヤホシテントウ幼虫の令期判定を棘毛で行っている。

ダイコンサルハムシ幼虫の場合は、背面に生えている毛の数と、体の表面の点刻の粗、密とを組み合わせることによって、令期を決定することができた。

外部形態による令期の推定

用いた材料は、1957 年 9 月から 11 月へかけて、松江市乃木の野菜畑から採集したものである。

ダイコンサルハムシ幼虫は 3 令を経過する (野津・園山, 1926) が、体の大きさによって、かなりの程度令期の推定ができるようである。私は、約 4,500 個体を取り扱ったが (脱皮直後の個体は除いた)、まずそれらの内から任意に 100 個体ほど取り出し、体の大きさによって、それらを大、中、小三つのグループに仮りに分け、おのおのグループの外部形態の違いを、顕微鏡で観察した。

背面から観察すると、各体節に数個の黒褐色の突起が見られるが、第 4 節以下の各節の中央に存在する 1 対の突起から生えている毛の数に、小グループと大、中グループとの違いが認められた。すなわち、小グループに属する個体の大部分は、おのおの突起から太くて長い毛が 1 本生えていたが、他の二つのグループの個体では、同じような毛が 2~4 本生えているものが主であった (第 1 図 A)。ここから、第 1 令と第 2, 3 令とは、体節の突起から生えている毛の数によって区別できるように思われた。

次に中グループと大グループとの区別であるが、見たところ両者は体の色が著しく異っていた。すなわち、中グループの個体の大部分は、頭部と体節の突起が黒褐色であるほかは、全体が白っぽく見えるのに、一方、大グ

¹ 島根農科大学応用昆虫学研究室業績, No. 18.

² Determination of the Larval Instar in *Phaedon brassicae* BALY. By Satoshi FUNAKI, Laboratory of Applied Entomology, Shimane Agricultural College, Matsue, Shimane Pref. Japanese Journal of Applied Entomology and Zoology, vol. 2, no. 2.

日本応用動物昆虫学会誌 第2巻 第2号 1958 (1957 年 12 月 12 日受領)